

# 社会科における子どもの社会参加のための資質・能力を育む授業づくり(第一年次)

## －「歴史を追究するコミュニティ」の活用を通して－

長期研究員 渡邊 匡彦

### 〈研究の要旨〉

本研究では、歴史に関する事柄を追究している人々と関わりながら問題解決することを通して、社会参加に必要な資質・能力の育成を目指した授業実践を行い、子どもが社会と関わりながら歴史を学ぶ効果について分析し、社会参加に必要な資質・能力を育む授業づくりの在り方について考察した。

## I 研究の趣旨

中央教育審議会の「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について(答申)」では、主体的に社会の形成に参加しようとする態度の育成が社会科の課題の一つであるとしている。特に、我が国の中学生、高校生の社会参加に関する意識の低さは喫緊の課題となっている中、本県においてもこれらの国の動向や目標に留意した取組が求められている。そのため、小学校段階から社会参加の視点で授業を行い、社会に主体的に関わり、社会的な問題を解決しながら、よりよい社会を創造するために必要な資質・能力を育てていくことが求められている。

そこで、本研究では、新学習指導要領で示された「社会に開かれた教育課程」の理念を基に、地域の人的・物的資源を活用したり、社会教育との連携を図ったりして、社会と関わりながら主体的に問題解決を行うことで社会参加に必要な資質・能力を育みたいと考えた。社会参加の視点で授業を行うことは、社会科のすべての領域において大切であると考えられるが、一年次研究では、特に子どもが社会とのつながりを見いだしにくいと考えられる歴史的分野を対象として研究を進めた。

## II 研究の概要

### 1 研究仮説

小学校の歴史学習において、以下の視点に基づき「歴史を追究するコミュニティ」を活用した授業づくりを行えば、社会参加のための資質・能力が育まれるだろう。

【視点1】 子どもの学びと「歴史を追究するコミュニティ」をつなぐ単元構想

【視点2】 子どもの思考の可視化、共有化、焦点化をキーワードとした授業づくり

### 2 研究の内容

#### (1) 歴史学習で育む社会参加のための資質・能力とは

歴史学習では、資料を比較したり関連付けたりして考察し、歴史的事象の特色や意義といった歴史認識を育むことが重要である。確かな歴史認識は、グローバル化の進む社会で、多様な人々と関わるために欠かすことので

きない資質・能力となる。また、歴史認識を深める過程では、子どもの自発的な問いかけを引き出したり、探究心を伴った学習にしたりすることで、多面的・多角的に考えたり、問い続けたりする力を養うことができる。それは、持続可能な社会の在り方を考える思考力や判断力の素地となる。さらに、社会と関わりながら歴史を学ぶようとする意欲は、進んで社会と関わりをもとうとする態度につながると考える。このことから、本研究では歴史学習における社会参加のための資質・能力を①確かな歴史認識、②多面的・多角的に考えたり、問い続けたりする力、③歴史学習への意欲ととらえ、授業実践を行った。

#### (2) 「歴史を追究するコミュニティ」の活用について

本研究では、歴史に関心をもち、歴史に関する事柄を追究している人々を仮想の共同体と見て「歴史を追究するコミュニティ」(以下、「コミュニティ」と定義付ける。そして、子どもがコミュニティにおける多様な人々と関わりながら、問題解決できるようにする。子どもはコミュニティへ参加し、歴史的な見方・考え方にふれることで、学ぶことの奥深さや楽しさを知ることができる。また、コミュニティとの関わりを生かし、調査、体験、討論、発表といった多様な学習活動を体験することで、授業への主体的な参加が促されると考える(図1)。

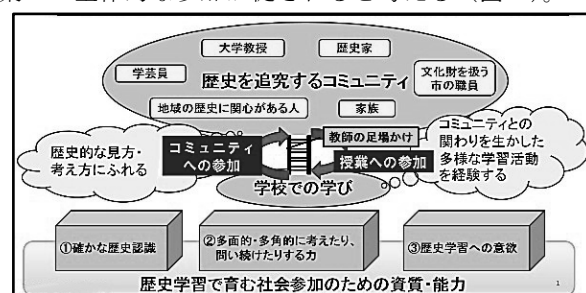


図1 研究の構想図

#### (3) 【視点1】について

子どもがコミュニティとの関わりに目的や意味を見いだせるように、授業だけでなく家庭学習においてもコミュニティにつながるができるようにした。授業では、県立博物館や歴史資料館の見学を行ったり、学芸員や地域の歴史家を授業に招いたりして、コミュニティへ参加するための足場かけを行った。家庭学習では、個人の問いに基づいて、コミュニティと関わりながら追究するこ

とを促し、授業と家庭学習の両面からコミュニティに働きかけて問題解決を行う単元の学習を構想した。

#### (4) 【視点2】について

コミュニティとの学びを通して出会う歴史的事象や歴史的な見方・考え方は多様であるため、子どもの内面の思考を可視化、共有化、焦点化した授業を行うことが重要となる。本研究では、特に以下の4点に着目した。

- 歴史的事象に関する問い    ○問いに対する気付き
- 問いに対する予想や見通し    ○考えの根拠

思考が可視化、共有化されることで、子ども同士の関わり合いが豊かになると考える。また、共有化された思考を焦点化することで、価値のある学びの方向性を定めることができるようになる。

### 3 研究の実際

#### (1) 授業実践単元について

研究対象	小学校第6学年 15名 (1クラス)
実践 I	「武士の世の中」 (6月 7時間)
実践 II	「世界に歩み出した日本」 (10月 8時間)

#### (2) 実践 I 「武士の世の中」

##### ① 【視点1】に基づく手だてと実際

###### ア 歴史家との学びを学習問題につなぐ

武士のくらしについて学習した後、子どもは「自分たちの地域にも武士は住んでいたのか」という問いをもった。そこで、地域の歴史家である石田明夫氏を授業に招き、問いについて説明してもらった。さらに、実際に武士の館跡調査に出かけ、石田氏に遺跡の案内をしてもらい自分の目で確かめる学習を行った(図2)。これにより武士の存在が身近になり、武士に対する関心が高まったことで、「武士の登場によってどのような世の中になったのか」という新たな問いが生まれ、単元の学習問題として位置付けることができた。



図2 石田氏による遺跡の説明

###### イ 探究的な課題で家庭学習をコミュニティにつなぐ

武士の館跡に関心をもった子どもが自らの追究を広げることができるように、授業者が地域の「遺跡マップ」を作成し、「ほかにどんな遺跡があるのか調べてみよう」と問いを投げかけた。子どもは、自分の住む地区の遺跡について石田氏に聞きに行ったり、家族と遺跡について話し合ったりして追究し、地域の歴史に対する理解を深めることができた。また、「源平の戦い」の学習で源氏が勝利したことを学んだ後に、「源頼朝は平氏を倒すために活躍した弟の源義経をなぜ殺そうとしたのか」という新たな問いが生まれたため、家庭学習の課題とした。教科書の記述にはない発展的な問いであったが、家族に聞いたり、書籍で調べたりして、自分なりの考えをまとめる

ことができた。こうした家庭学習への取組については、保護者から情報提供してもらい、「社会科通信」として発信することで、学習に対する理解と協力を得ることができるようにした(図3)。

教科書に書いてある歴史の結果をただ暗記するだけでなく、どうしてそれになったのか、それまでの過程をインターネット等で調べてみました。そのおかげで歴史に対する関心が高まり、歴史上の人物や事件をより深く理解できると思っています。いいことだと思います。

「疑問に思ふことを自分で調べてみる」学習をこれからも行ってほしいと思います。

図3 保護者からのコメント

##### ② 【視点2】に基づく手だてと実際

###### ア ずれを生かした問いの焦点化

子ども一人一人の考えのずれを表出させ、探究的に学べるように、一単位時間の学習問題を「～にもかかわらず、…なのはなぜか」という疑問形で問いの焦点化を図った。このような疑問形で焦点化された問いにより、ずれを解消しようとして、子どもは主体的に学び合い、問題解決することができた。

- ・当時源氏は劣勢だったにもかかわらず、優勢だった平氏に勝つことができたのはなぜか。(第4時)
- ・元の攻撃を退けたにもかかわらず、その後鎌倉幕府が衰退していったのはなぜか。(第6時)

###### イ 「振り返りカード」による思考の共有化

学級全員分の授業の振り返りを1枚のプリントにまとめ、「振り返りカード」として配付し、学びの記録として累積させた。「振り返りカード」がポートフォリオの役割を果たし、子どもは自らの振り返りに生かすだけでなく、友達の多様な考えの理解に役立てることができた。

#### (3) 実践 II 「世界に歩み出した日本」

##### ① 【視点1】に基づく手だてと実際

###### ア 自分たちの学びを地域の文化祭での発表につなぐ

実践 II では、単元を通して追究したことを歴史新聞にまとめ、地域の公民館が主催する文化祭で発表する機会を設けた。そのため、単元の初めに学習の内容と方法について説明し、子どもが学習のゴールの見通しをもち、授業と家庭学習の両面から継続的に問いの追究をすることができるようにした。実際の文化祭では、作成した新聞をパネルに貼って説明活動を行ったり、新聞を読んで答えるクイズを掲示したりした。また、新聞コーナーを紹介するちらしや印刷した新聞を配り、学習したことを理解してもらえようとして主体的に地域の方へ働きかけることができた(図4)。



図4 新聞を配る子ども

###### イ 学芸員との学びを問いの追究に生かす

単元の導入で県立博物館へ見学学習に行き、明治期のくらしや会津の偉人について学芸員から説明を聞いた

り、展示物を見たりした。地域の先人のくらしと関連させながら、世界における日本の立場を理解することで、人々の生活や社会の変化を多角的にとらえることができるようにした。また、医学の発展に寄与した野口英世を教材化し、野口英世記念館の学芸員を招いて、その業績について教えてもらうことで、地域の偉人に対する興味や関心をもつことができるようにした。このように身近な地域の歴史と学習内容を関連させることで、自分なりの問いや追究のテーマを設定しやすくなるようにした。

## ② 【視点2】に基づく手だてと実際

### ア 「学びのサポート」を活用した思考の可視化

子どもが自ら学習を進められるように、単元の年表、ことば（用語や歴史上の人物の説明）、単元の学習問題解決のためのワークシート、授業ごとの宿題とした歴史日記（ことばを活用したミニレポート）を一冊にまとめた「学びのサポート」を作成した。子どもは年表の歴史的事象を線で結んで関連付けたり、調べたことを書き加えたりして、自分だけの参考書として活用することができた。また、歴史日記で学習を振り返ることで思考が整理され、学びを深めることにつながった。歴史日記で出された子どもの問いや考えは授業で取り上げ、子どもの思考の流れに沿った学習展開になるようにした。

## Ⅲ 研究のまとめ

### 1 研究の成果

実践前後の子どもの意識調査で、「学習が分かる」という項目が86%から100%に、「専門家と共に歴史を学ぶことは重要だ」という項目が93%から100%に変容した。これはコミュニティと関わって歴史を学ぶことで、子ども自身が歴史認識を深めることができたことと実感していることによるものと考えられる。A君は実践前の意識調査で、歴史の学習が嫌いで、内容もよく分からないと答えていた。しかし、実践後は、歴史の学習はどちらかといえば好きで、内容もどちらかといえば分かると答え、さらに、授業後の感想にも以下のように述べられている。

……ぼくは野口英世のことはだいたい知っていたけど、まだまだ知らないことってあるんだなと思いました。先生の授業で知らなかったことがいっぱい分かりました。野口英世はこういうことを研究していたんだなと思いました。……今まで歴史はそんなでもなかったけど、なんか好きになりました。（A君の実践後の感想より抜粋）

A君はコミュニティとの関わりにより、自分にはまだ分からないことがあると気づき、そこから新たな問いの追求が始まった。その過程で未知への追究のおもしろさや、学びの手応えを感じて、歴史学習に対する認識が変容したと推察される。つまり、コミュニティと関わって歴史を学ぶ経験は、確かな歴史認識の育成と共に、歴史学習への意欲の向上に効果的に作用していたと考える。

また、授業の学習問題や自らの問いの追究を通して、多面的・多角的に歴史的事象について考えることができ



図5 Bさんがまとめた歴史新聞

るようになった。Bさんは、県立博物館の見学学習で崩壊寸前の会津若松城の写真を見たことをきっかけに、なぜ会津藩が戊辰戦争に巻き込まれていったのかを追究した。そして、追究を生かしてまとめた歴史新聞において、会津藩と天皇や新政府軍との関係性から、戊辰戦争の歴史的な意義を問い直す姿がみられた(図5)。さらに、「編集後記」において、「運命の変転の中で会津の人々は『義』の心を持ち続けました。今、私達もその心をつないでいくべきだと思います。遠い未来へ」と述べ、自分が地域の一員として、歴史とどう関わらなければならないかについて考えを主張している。歴史新聞は先述した文化祭での発表を目的に作成したものであり、地域に向けて自らの考えを主張するBさんの姿は、歴史の学びを通して社会と関わっていることを意味し、社会参加に必要な資質・能力が統合的に育まれた姿と考える。以下に示す実践後の感想からは、自らの学びの深まりの実感と、歴史をさらに学び続けようとする意志を推察することができる。

昔の歴史があったから今があることをよく知った。実際に体験したり、話を聞いたりするなどよい経験になった。もつとくわしく調べたいことがたくさんあるのでわくわくする。（Bさんの実践後の感想より抜粋）

こうした事実から、社会参加のための資質・能力の育成には、コミュニティの活用を通して、子どもが社会と関わりながら歴史を追究する魅力にふれ、自らの学びの深まりを実感し、社会との関わりに意味や価値を見いだせるようにしていくことが重要と考える。その上で、子どもが「自分事」として歴史について考えたことを、社会に向けて発信するような関わりをつくり出していくことで、各資質・能力は統合的に育まれていくと考える。

### 2 今後の課題

歴史的な分野以外でもコミュニティの活用についての研究を進め、社会科全体で社会参加のための資質・能力を育む授業づくりの在り方について考えたい。【視点1】については、長期的なカリキュラム・マネジメントによって、時期や関連を視野に入れた単元構想ができるようにしたい。また、【視点2】については、子ども同士の対話を活性化するために、子ども自身が思考を可視化、共有化、焦点化する必然性をもてるように指導を工夫したい。